宍道町ふるさと文庫17

伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）と宍道町の弥生時代

発刊にあたって

あれは昭和36、37年頃だったか、東京の新聞社から休みをとって帰省すると、父が「なんと、うちに銅鐸があったわ」と言った。蔵から持ち出して見せてくれた「銅鐸」に私は唖然とした。それは、いつも床脇に吊るされたり、時には納戸の隅に転がっていた「釣り花生け」ではないか。しかしよく見ると奇怪な眉、目、鼻を備えた人面が描かれ、まさしく弥生銅鐸であることに間違いはない。だが、この銅鐸がいつどこで出土したか、いかなる経路で木幡家に入ったかは、当時島根県文化財保護審議会長をしていた父も全く知らなかった。思うに、銅鐸の研究が本格化したのは戦後のことで、我が家でも貴重な弥生遺物とは知らず、ただの釣り花生けとして使っていたのだろう。

斐川町の神庭荒神谷、加茂町の岩倉遺跡から大量の弥生青銅器が出土して以来、世間は専らその「大量」ぶりを囃し立てたが、わが「木幡家銅鐸」の特異性と希少価値は微動もしていない。近年でも大阪、神戸・佐賀、徳島など各地の博物館から要請を受けて出陳し、千葉の国立歴史民俗資料館、兵庫の辰馬考古資料館、松江市の風土記の丘資料館にはレプリカが展示されている。とくに佐賀県吉野ヶ里遺跡から“兄弟銅鐸”が見つかってからは一段と注目されるようになった。その「全国区」的活躍ぶりは宍道町では珍しい存在だが、残念ながら地元では余り認識されていない。

今回、県古代文化センターの丹羽野裕さんが「木幡家銅鐸」について大変分かりやすい解説を書いて下さった。学校教育、社会教育に役立てていただければこの上ない喜びである。

八雲本陣記念財団

理事長　木 幡 修 介

目　　次

1．はじめに　－伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）－ …… 1
2．銅鐸とは何だ …… 4
　①　銅鐸は弥生時代に使われた …… 4
　②　銅鐸は音を鳴らす楽器だ …… 5
　③　銅鐸は多くの模様で飾られている …… 7
　④　銅鐸はお祭りに使われた …… 10
　⑤　銅鐸は農耕とかかわりが深いらしい …… 11
　⑥　銅鐸は弥生時代のハイテク技術で作られた …… 14
　⑦　銅鐸は時がたつに従って変化する …… 15
　⑧　銅鐸は近畿地方を中心に分布している …… 17
3．伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸） …… 19
　①　蒐古館の銅鐸模様は変わっている …… 19
　②　蒐古館の銅鐸の絵は素晴らしい …… 24
　③　蒐古館の銅鐸の仲間たち－福田型銅鐸－ …… 25
　④　蒐古館の銅鐸と吉野ヶ里銅鐸は兄弟だ …… 28
4．銅鐸と弥生時代 …… 29
　①　水田稲作のはじまりと銅鐸 …… 29
　②　クニの誕生と銅鐸の変化 …… 32
　③　埋められる銅鐸 …… 34
5．宍道町周辺の弥生時代と青銅器 …… 41
　①　莫大な青銅器 …… 41
　②　有力者の墓 …… 44
　③　弥生時代のムラ …… 49
6．おわりに …… 52

1．はじめに　－伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）－

宍道町蒐古館には、1個の銅鐸が展示してあります(注)。一般の方々にはあまり知られていないかもしれませんが、この銅鐸は今まで、多くの考古学者たちが何度も取り上げてきた有名な銅鐸なのです。銅鐸を紹介した本のグラビアにも何度も登場しているほどで、研究者はもちろん銅鐸に興味を持つ人たちは、一度は目にしたことがあるといっても言い過ぎではないでしょう。

なぜそれだけ有名なのでしょう。その理由は、なんと言ってもこの銅鐸に描かれた「眼」にあります。やや太めの線で、眉、鼻とともに銅鐸に描かれているこの眼は、なんとも妖しげな雰囲気を漂わせます。このような眼が描かれた銅鐸自体が非常に少ないのですが、同類の眼が描かれているどの銅鐸よりも飛びぬけてリアルな表現です。それだけに、この種の銅鐸を考える上で、貴重な研究材料にもなっています。そして何よりも、この銅鐸が持つ怪しげな雰囲気が、見るもの

写真1　伝出雲出土銅鐸全景

の心を捉えて離しません。この銅鐸の重要性はそれだけではありません。銅鐸に描かれているのは絵だけではなく、さまざまな文様で飾られています。蒐古館の銅鐸の文様は一般的な銅鐸の文様と異なっています。ですから、数ある銅鐸の中でも、その文様を研究する上で貴重な題材となってきました。

さてこの銅鐸は、宍道町の木幡家にずいぶん前から伝わってきたものだそうです。江戸時代のわが国の文人の間では、銅鐸を文房（書斎）飾りに使うことが流行しました。木幡家でもこの銅鐸を逆さまに吊るし、中に竹筒を入れて釣り花生けとして使っていたようで、よく見ると銅鐸下部の両側に小さな穴が開けてあり（今は穴埋めがしてある）、その穴に鎖（くさり）を通して床脇などに掛けていたようです。それが昭和35年ごろ、当時島根県立博物館の学芸員だった近藤正さん（故人）や島根大学の山本清先生（故人）によって銅鐸であることが確認されました。その後、この銅鐸は全国的にも類例の少ない銅鐸として、県内外の多くの研究者が論文の中で紹介したり、本に載せたりして全国的に有名となったのです。昭和37年には、島根県の有形文化財にも指定されました。

ところがこれだけ素晴らしく、有名な銅鐸にもかかわらず、宍道町でどれだけの人がこの銅鐸を見たことがあるでしょう。また見たことがある人でも、どれだけの人がこの銅鐸が持つ重要な意味を知っておられるでしょうか。きっと「知らないなぁ。」とか「見たことあるけど、どんなものだったかよく覚えてないなぁ。」とか思う人がほとん

どでしょう。無理もありません。蒐古館にくると、周りはきれいな美術品ばっかり。地味な銅鐸にはなかなか目がいかないでしょう。でも、目を凝らしてしっかり見ると、じわじわと素晴らしさが伝わってくるはずです。

この本は、これから蒐古館の銅鐸を見る人の手助けをするために、作ることになりました。それではこれからじっくりと、銅鐸のお話をしていきたいと思います。

注　この銅鐸は「木幡家の銅鐸」「推定島根県出土銅鐸」「伝出雲出土銅鐸」など、さまざまな名で呼ばれてきています。本書では煩雑な表現を避けるため、以下本文では「蒐古館の銅鐸」と記していきます。

2．銅鐸とは何だ

伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）についてお話する前に、まずは一般的な銅鐸について説明しておきましょう。銅鐸とは何か、これは実はもっとも難しい質問です。何しろ私たちは今、現代に生きており、残念ながら銅鐸が作られ、使われていた時代を見てきた人は一人もいないのですから（中には見てきたように話す人もいますが・・・・）。でも、私たちは考古学という学問を通じて、銅鐸に残されているさまざまな情報を読み取ることができます。そして読み取られた事実を積み重ねることで、はるか古代の歴史に近づくことができます。銅鐸についても、多くの事実が積み重ねられ、多くの研究が積み重ねられて、その持つ意味が明らかにされてきました。そのような成果をもとに推測も交えて、銅鐸について一つずつお話したいと思います。

①　銅鐸は弥生時代に使われた

銅鐸が使われたのは、弥生時代（約2500年前から1700年前）です。もう少し細かく言うと、弥生時代前期の終わりころから後期ころまで、ざっと４～500年間使われていたものと考えられます。

なぜ弥生時代だとわかるのか？　一番の大きな理由は、銅鐸に描かれた文様には弥生土器の文様と同じものが多いことです。また描かれている絵を見ても、弥生土器に描かれているものとおなじモチーフが

表１　弥生時代の略年表と銅鐸が使われた時期

年代	約2500年前		約2000年前		約1800年前	3世紀後半頃
弥生時代の時期区	早期	前期	中期	後期	終末期	古墳時代
	水田稲作が伝わる	水田稲作が東北まで伝わる	銅鐸が使われた期間		邪馬台国の時代	前方後円墳が作られ始める

同じ手法で描かれているのです。また、銅鐸を作る鋳型は必ず弥生時代の遺跡から見つかりますし、非常にまれですが、弥生時代の集落跡から銅鐸そのものが出ることもあるからです。

弥生時代は、大陸から水田稲作が伝わり、それまでの狩猟・採集を中心とした縄文時代から大きく社会が変動していった時代です。銅鐸の出現は、弥生時代という時代背景と密接にかかわっています。

②　銅鐸は音を鳴らす楽器だ

銅鐸を一目見て、お寺の「釣鐘」を思い浮かべた人も多いと思います。身の内部が共鳴しやすい中空となり、上から吊り下げる釣り手がついた形は、まさに釣鐘と同様の構造です。しかしながら、釣鐘には

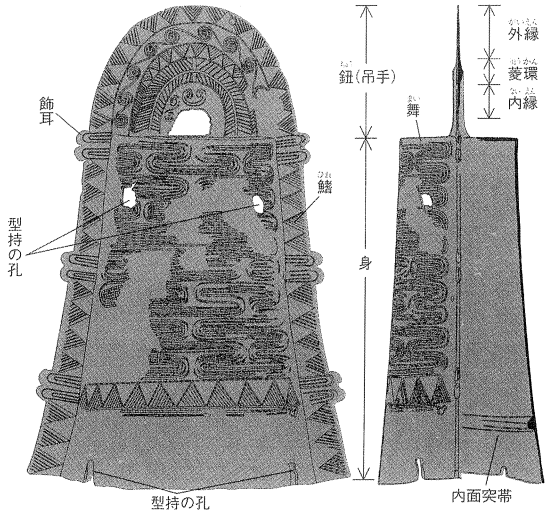


図1　銅鐸の部分名称
（島根県教育委員会編『古代出雲文化展－神々の国　悠久の遺産』より転載）

撞木（鐘を打つひもで吊り下げられた丸太）で打ちつけけるための座（丸い出っ張り）がありますが、銅鐸にはそんなものはありません。外側をガンガンたたいたような痕跡もほとんど見ることはできません。

それじゃあカネじゃないのか。いえいえ、そんなことはありません。銅鐸の音を鳴らす秘密は内側にあります。銅鐸には、その内側の下縁あたりに、必ず帯のよう飛び出した部分（内面突帯）があります。この突帯は磨り減っていたり窪んでいたりするのが当たり前で、何かが何度もその部分に当たっていたことを物語っています。また、まれではありますが、銅鐸といっしょに「舌」と呼ばれる片方に穴のあいた細長いものが出て

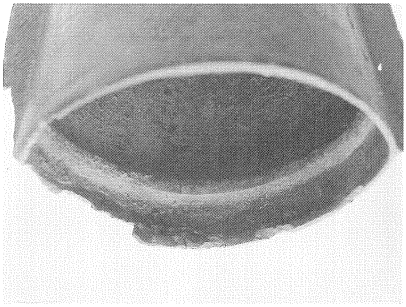


写真2　銅鐸の内側（荒神谷遺跡1号銅鐸の内面突帯）
島根県教育委員会提供

図2　牛の首にかけられた鈴（島根県古代文化センター編『いにしえの島根ガイドブック』より転載）

くることがあります。ここまで言えばお分かりでしょう。銅鐸はその内側に舌を吊り下げ、銅鐸を揺すったりして舌を内側にたたきつけることで音を出したのだと考えられるのです。

銅鐸が楽器だったことは、その系譜をさかのぼっても確認することができます。銅鐸は直接的には、朝鮮半島の小銅鐸が祖形だったと考えられています。小銅鐸は、呪術者や司祭者が首にかける鳴り物と考えられ、さらにさかのぼると古代中国の家畜の首にぶら下げるベルに行き着くといわれています。銅鐸は、大陸で用いられた小型のベルが、日本で独自の発達を遂げた楽器だったのです。

ところで、銅鐸は楽器だった、と完全に言い切ってしまえない部分もあります。銅鐸は長い間使われるうちに次第に変化をしていきます。そして銅鐸が使われなくなる直前の新しい銅鐸は楽器としての機能を失っていると考えられます。このあたりのことは、また後で詳しく話したいと思います。

③　銅鐸は多くの模様で飾られている

銅鐸は、そのほぼ全体が模様や絵によって飾り立てられています。身に描かれた模様は、まず大きく2種類の基本形に分けることができ

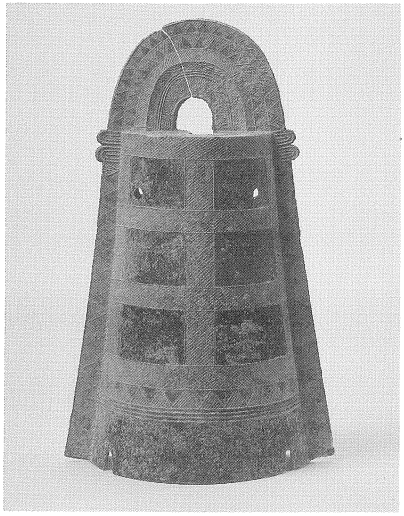


写真 3　袈裟襷文銅鐸
（加茂岩倉遺跡20号銅鐸）
島根県教育委員会提供

写真 4　袈裟襷文
（加茂岩倉遺跡 8 号銅鐸）
島根県教育委員会提供

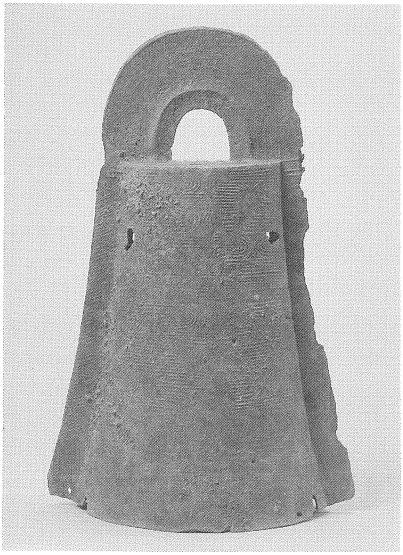


写真 5　流水文銅鐸
（加茂岩倉遺跡 5 号銅鐸）
島根県教育委員会提供

ます。一つは袈裟襷文銅鐸、もう一つは流水文銅鐸です。

- **袈裟襷文銅鐸**　3 列の縦帯と 3 列もしくは4列の横帯が交差する文様です。縦帯と横帯によって、4 つもしくは 6 つの四角い区画が形作られ、

その区画の中に絵が描かれることもあります。帯の中は、細かな斜線が交差する文様（斜格子文）で充たされることがほとんどです。

- **流水文銅鐸**　数本の並行するラインが、水平方向に伸びたりUターンしたりしながら、まるで流れる水のような文様を作り出しています。

銅鐸の大部分は、この2種類の基本形の中に収まりますが、いくつか例外もあります。その代表が、3列から4列の横帯だけで銅鐸の身を仕切る「横帯文銅鐸」です。蒐古館の銅鐸は、実はこの横帯文の銅鐸です。

銅鐸は以上のような基本装飾のほかに、数多くの模様で装飾されます。代表的なものを上げておきましょう。

- **綾杉文**　3本の線にはさまれた2列の帯の間を、方向の異なる斜線で埋めた文様です。杉の木の葉に似た形をしているのでこの名前があります。釣り手（鈕）の部分の装飾によく使われます。
- **鋸歯文**　3角形を連続して描いた模様で、内部は斜線で埋められています。鋸の刃のような形なの

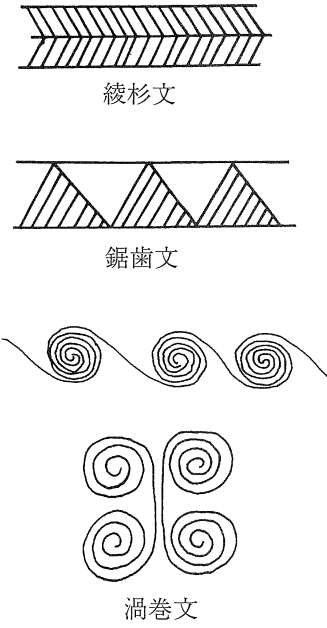


図3　銅鐸に描かれた文様

でこの名前があります。身の回りに付属する飛び出し部分（鰭）の装飾によく使われます。

- **連続渦文**　連続する渦巻きが直線でつながれた文様です。

④　銅鐸はお祭りに使われた

銅鐸は基本的に楽器だったことがわかりましたが、どんなときに使われたのでしょうか。結論を先に言うと、お祭りのときに用いられたと考えられています。その一番の根拠は、その出方にあります。銅鐸がムラの遺跡から出てくることはほとんどありません。多くは人里はなれた山の中に、ひっそりと埋められているのです。それだけで、銅鐸が日常生活とは直接関係のない器物であることは想像がつきます。全体をさまざまな模様や絵で飾る、装飾性の高さも銅鐸が特別な場で使われたものであることを思わせます。

ちょっと私たちの現代生活に思いをはせてみましょう。日常の中で鐘のようなものを鳴らすのはどのような場面でしょう。

○　神社にお参りするときに、ぶら下がっている綱を振って大きな鈴を鳴らす。

○　お寺にお参りするときに銅鑼のような鰐口を綱でたたいて鳴らす。

○　仏壇にお参りするときに、チン、と鳴らす。

○　お経を読むときに、木魚やシンバルのような鳴り物を鳴らす。

○　お祭りで鳴り物をにぎやかに打ち鳴らす。

こうして数え上げてみると、まず思い浮かぶものが信仰にかかわる場面であることがわかります。何かお願い事をするときに、大きな音を鳴らして神様（仏様）の注意を引く、お祭りの場面で神様を楽しませる、お祭りで人々の気分を高揚させる、といった意味合いでしょうか。もちろん現代は、音楽を楽しむために太鼓やドラムをたたくこともありますが、そもそも音楽は信仰と深くかかわって発展してきた側面が非常に大きいことも事実です。現代感覚と古代とを直接結びつけるのは危険な面もありますが、銅鐸の特殊な出方や豊かな装飾性などを加味して考えると、お祭りの道具だったと考えるのがもっとも自然でしょう。

⑤　銅鐸は農耕とかかわりが深いらしい

それでは何のお祭りに使われたのでしょう。これも見たことのない私たちにはたいへん難しい質問ですが、ある程度の推測は可能です。銅鐸が使われた弥生時代は、大陸から水田稲作が伝わった時代です。縄文時代には全く見られず、北海道を除く日本列島のほぼ全域に稲作が行きわった前期終わり頃に現れる銅鐸は、農耕、特に水田稲作と関係が深そうなことは想像できます。

このことは、銅鐸に描かれた絵を見てみるとよく分かります。銅鐸の絵の主だったモチーフをあげてみましょう。

〇動物・昆虫　　鹿、いのしし、首の長い鳥（さぎ）、魚、亀（すっぽん）、いもり、かえる、かに、かまきり、と

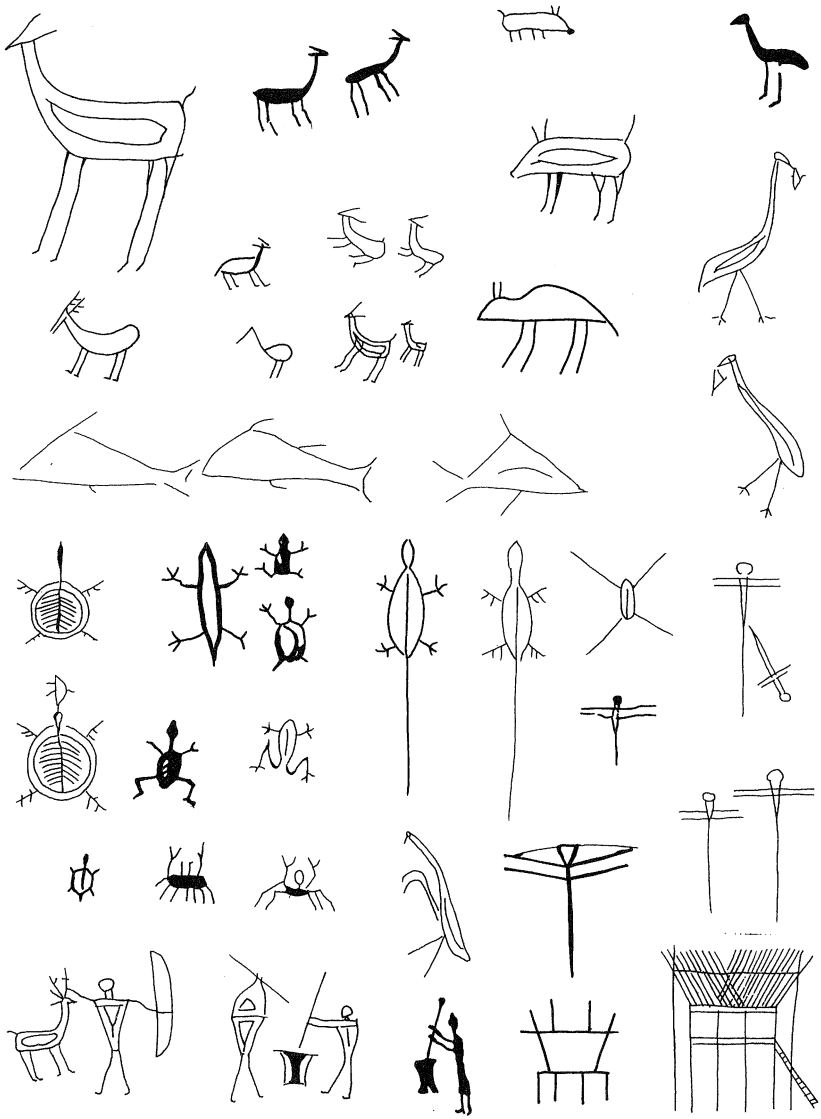


図４　銅鐸に描かれた絵（国立歴史民俗博物館編　佐原真構成
『歴博フォーラム　銅鐸の絵を読み解く』をもとに作成）

んぼ、あめんぼ、等

○人物　杵をつく人、狩をする人、魚を釣る（？）人、仲裁をする（？）人、等

○その他　高床倉庫、舟、等

絵が描かれている銅鐸は結構多いのですが、その題材をあげてみると意外に限られていることがわかります。まず数限りない動物や昆虫のなかから、限られたこれだけの種類しか描かれていないところを見ると、その選択には何がしかの意味があると考えるのが自然です。4本足の哺乳動物は、鹿といのししにまず限られます。しかも大部分が鹿です。後の時代のことですが、古事記などに記された神話には、鹿が田を守る精霊として扱われているものがあります。また春に角が生え、秋に落ちる鹿の角のサイクルと、田植えから稲刈りに至る水田稲作のサイクルが同じ事から、米の豊饒を象徴する動物として扱われた、という考えもあります。鳥は首の長い水鳥（おそらく鷺）に限られます。鷺は水田で最も一般的に見ることのできる鳥といっていいでしょう。魚や両生類、昆虫類は、まさに水田に集まってくるものたちばかりです。

満々と水が張られた水田の風景を思い起こしてみましょう。田んぼの水面にはアメンボがすべるように泳ぎ、比較的温まった水で多く発生するプランクトンや小さな虫たちを求めてカエルやイモリ、小魚も集まってきます。水路にはもちろんカニや魚が泳ぎ、稲にはバッタや

カマキリ、そして魚を求めてサギたちが舞い降ります。まさに銅鐸に描かれた生物たちの世界です。

人の動作は解釈が難しいのですが、杵つきの風景はまさに収穫した米の脱穀風景で、それが農耕儀礼の１場面という説もあります。また高床倉庫は、収穫した米を保管するための施設であることは言うまでもありません。

このように、銅鐸に描かれた絵は、水田稲作に関わり深いものが大部分であることがわかります。銅鐸の使われ方と、描かれた絵が無関係とは思えません。銅鐸が農耕、特に水田稲作にかかわる祭りに深く結びついているからこそ、このような題材が描かれたと見て間違いないでしょう。

⑥　銅鐸は弥生時代のハイテク技術で作られた

銅鐸は、銅と錫（すず）、鉛（なまり）の合金である青銅を溶かし、鋳型（いがた）に流し込んで作る「鋳物（いもの）」です。当然金属を溶かすのですから、たいへんな高い温度が必要となり、それだけでも高度な技術が必要となります。さらに銅鐸は数ミリの厚さしかありません。しかもその表面には、実に繊細な模様や絵が鋳出されています。このような銅鐸を作るには、湯（溶けて液体になった青銅）を隅々まで行き渡らせるたいへん微妙で高度なテクニックが必須でした。しかも古い銅鐸は石の鋳型で作られました。今の鋳物の技術では、当時の銅鐸を再現することは不可能といわれるほどのハイテク技術です。

当然このような銅鐸は、限られた職人にしか作ることはできなかったはずです。また青銅は基本的に大陸からの輸入品でした。つまり銅鐸は、当時大変な貴重品だったのです。

ところで、銅鐸にはその上の部分や正面に穴が開いていることはご存知でしょう。この穴は単なる装飾ではありません。銅鐸を作る上で重要な役割を担っています。銅鐸は中身が中空ですので、外型と内型を組み合わせて、その隙間に銅を流し込まなければなりません。ただし、外型と内型の間に隙間を作るには、何ヶ所かに双方の型を支える部分が必要となります。それが「型持（かたもち）」と呼ばれる部分で、銅鐸の穴はその型持の痕跡なのです。

⑦　銅鐸は時がたつに従って変化する

はじめにお話したように、銅鐸は数百年にわたって使われました。その間、全く同じ形をしていたのではなく、少しずつ変化をしていきました。変化を見る大きな基準の一つが、吊り手（鈕（ちゅう））の形です。

銅鐸の祖先である朝鮮半島の小銅鐸や中国のベルは、人や家畜の首にぶら下げるものでしたから、釣り手の幅は狭く、一定程度の厚みがあります。もちろん飾りは全くありません。よって日本の最古段階の銅鐸は、釣り手の幅はさほど広くなく、断面は厚みのある菱形をしています（菱環鈕式（りょうかんちゅうしき））。次の段階になると、菱形の吊り手部分の外側に飾りの縁がつきます（古段階、外縁付鈕式（がいえんつきちゅうしき））。さらに次は、内側にも飾りの縁がつきます（中段階、扁平鈕式）。そして最後には、飾り

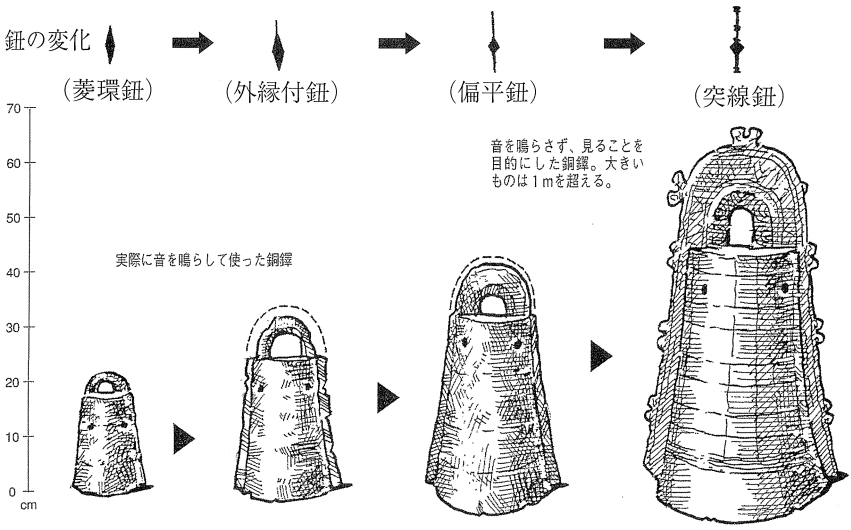


図５　銅鐸の変遷模式図

縁に太い凸線がつきます（新段階、突線鈕式）。つまり、銅鐸は単に吊り下げるための機能に、どんどん装飾を加える形で変化をしていったのです。

もう一つの変化の基準は、その大きさです。最古段階の銅鐸は、高さがせいぜい２～30㎝と小型です。それが時期を経るに従って次第に大型化していき、新段階になるともう振って鳴らすことができない、「見る銅鐸」になります。最も新しい頃には１ｍを超える巨大な銅鐸も現れます。

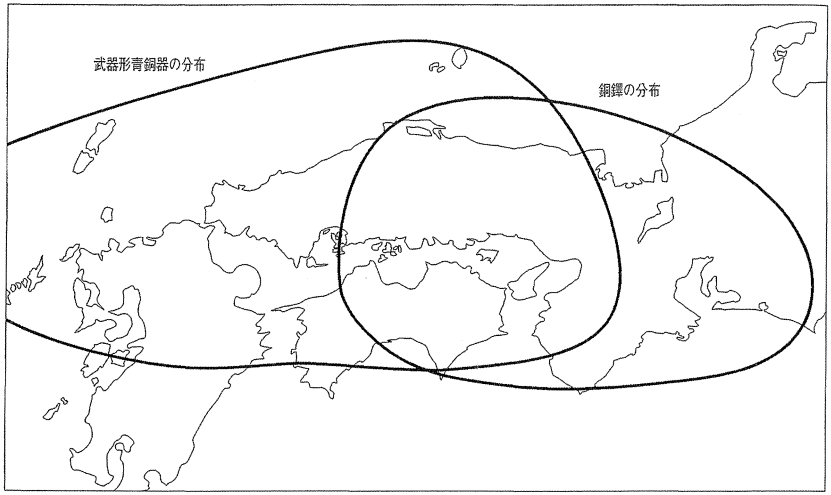
まとめると、銅鐸は鳴らすことを重視したお祭りの道具から、装飾が増え、大きくなることで見せることを重視した（見る人を威圧する）

お祭りの道具に変わっていったのです。

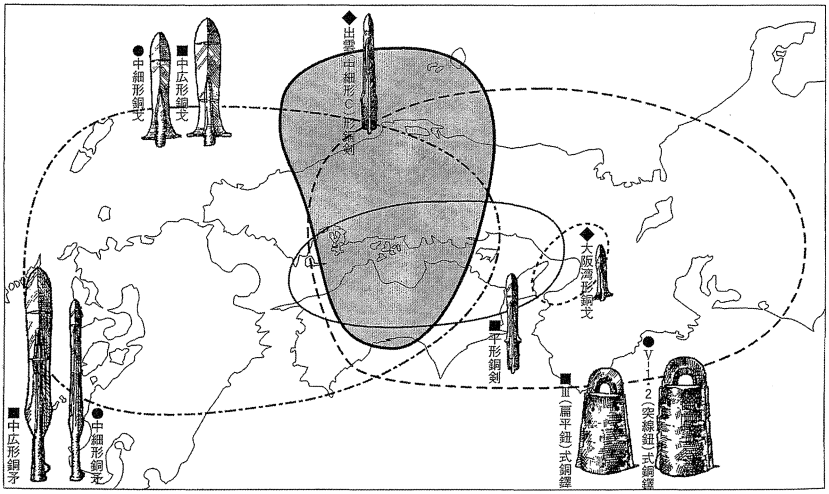
⑧　銅鐸は近畿地方を中心に分布している

弥生時代に日本で使われた青銅器は、大きく 2 種類に分けることができます。一つは銅鐸、もう一つは剣や矛の形をした武器形の青銅器です。この 2 種類の青銅器は、大雑把に言うと銅鐸が近畿地方を中心に中四国地方から東海地方にかけて、武器形青銅器が九州を中心に中四国から近畿地方の一部にかけてから多く出土しています。このような事実から、日本の弥生時代は近畿と九州を中心とした 2 つの大きなブロックに分かれると考えられてきました。銅鐸文化圏と銅矛・銅剣文化圏です。このような考え方に基づいて、銅鐸は近畿地方で作られて、周辺の地方にもたらされたものだと考えられてきたのです。

この考え方は、大所高所から眺めれば、今でも間違っているわけではありません。ただ、調査例が増え、研究が進んだ現在、細かな時期や型式によってはこの図式に当てはまらないものも多いことがわかってきました。実は伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）も、この図式に当てはまらない例の一つだったのです。



比較的古い時期の青銅器の分布図



各地の地域色が現れた段階の青銅器分布図

図6　青銅器の分布

3．伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）

それでは本題の蒐古館の銅鐸についてお話をしていきましょう。この銅鐸は吊り手（鈕）の上半分が壊れてなくなっていますが、今の状態で高さ22.5㎝、復元した高さが28.5㎝ほどの比較的小型の銅鐸です。吊り手の型式で言うと、鈕の外側に飾り縁がつく古段階で、その中では新しい部類に入るといわれています。作られた年代は紀元前1世紀頃でしょうか。

身の上の面には、型持（鋳型の外型と内型の間を支える部分）の四角い穴が2カ所あります。身の正面にも円形の穴が表裏それぞれ2ヵ所、計4ヵ所開いていますが、この正面の穴はどうやら銅鐸が鋳上がって後に開けられた穴のようで、型持ちの穴ではないようです。このことは、この銅鐸を考える上での大きな鍵の一つになります。

①　蒐古館の銅鐸模様は変わっている

蒐古館の銅鐸に描かれた模様は、前の章でお話した一般的な銅鐸の模様とはかなり趣きが異なります。これもこの銅鐸を考える上での大きなポイントですので、一つずつ取り上げてみましょう。

- 模様の基本構成は横帯文である。

この銅鐸の模様の基本構成は、銅鐸の大部分を占める袈裟襷文（けさだすきもん）や流水文（りゅうすいもん）ではありません。3列の横帯で身を区画する横帯文（おうたいもん）です。

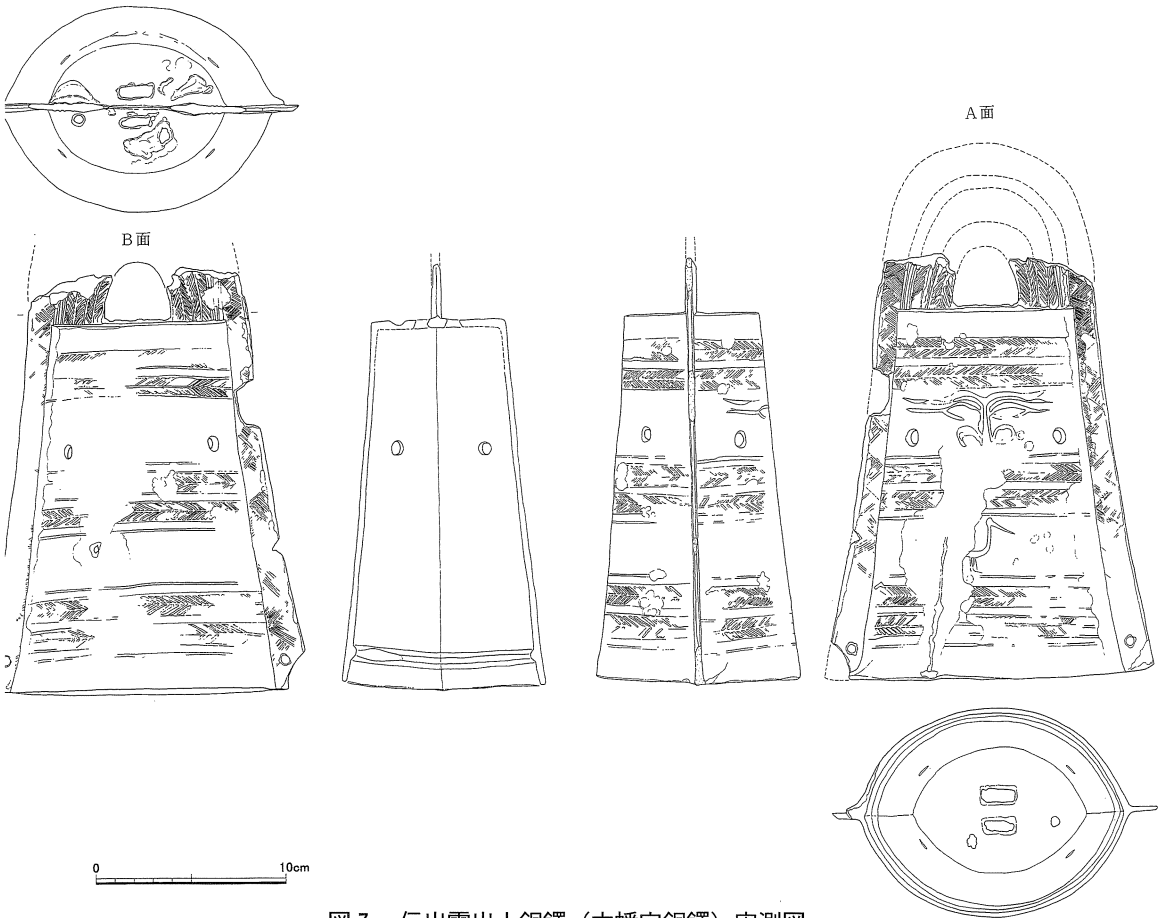


図 7　伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）実測図

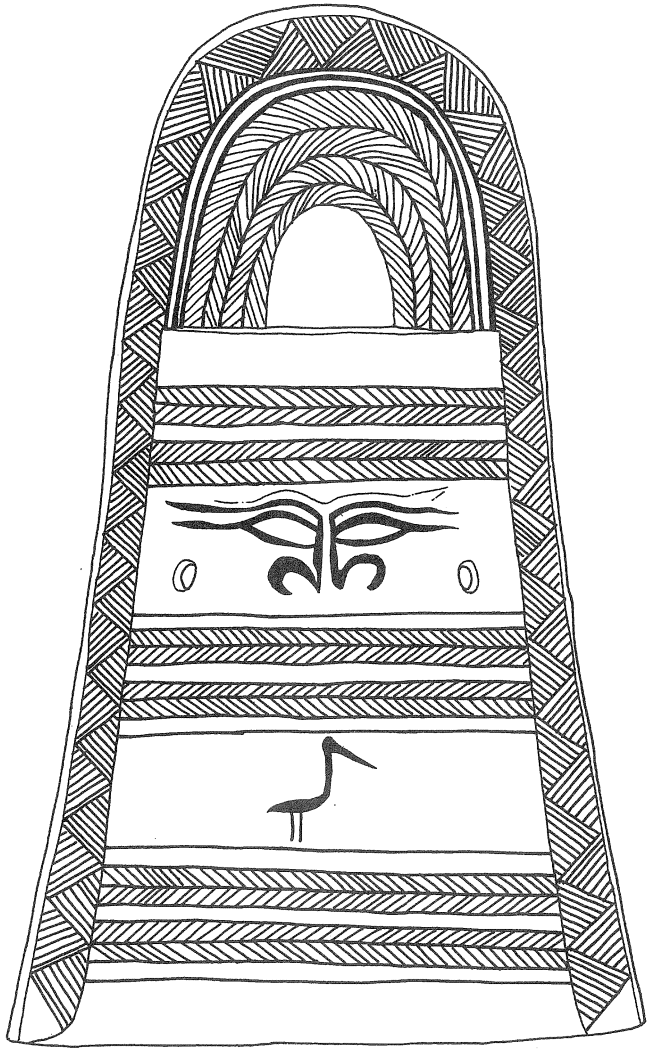


図 8　伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）　復元想定図

表2　伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）の測定値

部分		面		測定値(㎜)	備考
高さ				22.5(28.4)	かっこ内は復元値
身	高さ			195	
	底部		長径	139	
			短径	106.5	
舞	長径	A面		92.2	
		B面		91.1	
	短径			70.1	
型持孔	舞	A面	長径	16.5	
			短径	6.5	
		B面	長径	15	
			短径	5.5	
	身	A面	左	8.7(7.45)	かっこ内は内面径
			右	7.5(6.4)	〃
		B面	左	7.6(7.0)	〃
			右	7.1(5.7)	〃
鈕	菱環部幅	A面	左	21.6	舞との接続部の測定値
			右	21	〃
		B面	左	20.8	〃
			右	21.5	〃
	外縁幅	A面	左	13.4	〃
			右	12.6	〃
		B面	左	13	〃
			右	12.9	〃
	菱環と鰭の間	A面	左	6.4	舞との接続部の測定値
			右	6.7	〃
		B面	左	6.6	〃
			右	7	〃
	菱環最大厚		左	6.1	左右はA面に向っての方向、
			右	5.3	舞との接続部の測定値
横帯綾杉幅	第1横帯	A面	上	11.1	中央付近の測定値
			下	11.1	〃
		B面	上		
			下	11.9	中央付近の測定値
	第2横帯	A面	上	11	〃
			下	10.5	〃
		B面	上	13.2	〃
			下	10.7	〃
	第3横帯	A面	上	11.1	〃
			下	10.4	〃
		B面	上	11.8	〃
			下	13.3	〃
内面突帯幅		A面		9.1	〃
		B面		7.6	〃

※表内の左右は、当該面に向かっての方向である。

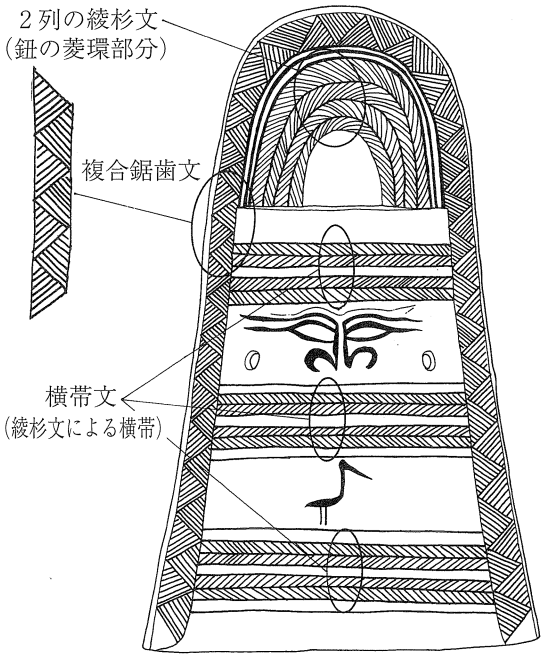


図9　伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）特徴ある文様

それぞれの列の横帯は、2段の綾杉文からなっています。珍しい横帯文の銅鐸の中でも、すべての横帯が綾杉文で構成されるものはさらに稀有です。

- 鰭や鈕の外縁は複合鋸歯文で飾られる。

身の外縁突起部分（鰭）や鈕の外縁が、内向きにも外向きにも鋸歯文が配された複合鋸歯文（図9）で飾られています。一般の銅鐸は、内向きだけの単純な鋸歯文で飾られていているのが普通で、珍しいパターンです。

- 菱環部分の模様が2列の綾杉文である。

釣り手の断面が菱形部分には、2列の綾杉文が描かれています。この菱環部分に綾杉文が描かれる銅鐸は多いのですが、大部分は1列で、この銅鐸のように2列あるのは珍しいといえます。

以上のように、蒐古館の銅鐸は、模様の基本構成から周辺の模様に

いたるまで、一般的な銅鐸とは異なっているのです。

②　蒐古館の銅鐸の絵は素晴らしい

蒐古館の銅鐸といえば、何と言っても身の中央に描かれた端正で神秘的な目鼻が特徴です。目は分厚い凸レンズのような形で、左右で少し大きさが違いますが、アンバランスな感じは受けません。黒目は描かれておらず、何を見ているかわからない空虚な白目が謎めいた雰囲気を漂わす大きな要素となっています。目の上には平行して眉も描かれ、左右に長く伸びています。末端に向かってわずかに切れ上がっていく眉の流れは、絶妙です。眉に合わせて目尻も切れ長に長く伸びていますので、あたかも歌舞伎役者のメーキャップのような妖しい効果を上げています。眉、眼に接して鼻筋がとおり、左右の鼻のふくらみ（鼻翼）も効果的に表現されています。

銅鐸の絵の大部分は、細い線で描いた「線画」です。ところが蒐古館の銅鐸の絵は、太い線でくっきりと表現され、あたかも「浮彫り」のように感じられます。実際に、眉の上は深くくぼんでおり、鋳造の後に彫り込んだ可能性もあるのです。

弥生時代の土器や銅鐸に描かれている絵は、大部分が稚拙で小さな

写真 6　描かれた眉目

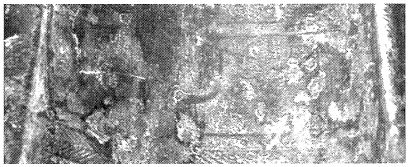


写真 7　描かれた水鳥

子どもが書いたような絵です。そのような中で蒐古館の銅鐸に描かれた目鼻は、飛びぬけて洗練されています。写実的とはいえませんが、デフォルメが適所に効果的に施されて、実に面妖で魅力的な顔といえるでしょう。弥生時代の芸術家の作といっていいと思います。

目鼻の下には、首の長い鳥が描かれています。この種の鳥は、銅鐸によく描かれているモチーフで、その特徴から鷺（さぎ）か鶴（つる）に限定されるでしょう。ただ、前にも話しましたように銅鐸に描かれる動物や昆虫などの大部分が、水田で見ることができるものたちであることから考えて、田んぼ仕事が行われる季節にも日本にいる留鳥で、現在でも水田でよく見かける鷺と考えるのが一般的です。この鷺も全体が浮き上がった「浮彫り」風な表現で描かれています。くちばしがたいへん長く表現されていますが、さほどの違和感はありません。目鼻同様の巧みなデフォルメだと感じられます。

正面を向いた目と横向きの鳥の対照もなかなか妙です。しかも、鳥をわざわざ中央から少しずらして、上の鼻筋の延長線上に頭と首筋を持ってくる構図にはうならされます。やはり芸術家だと私は思います。

③　蒐古館の銅鐸の仲間たち－福田型銅鐸－

蒐古館の銅鐸の特徴を説明してきましたが、この銅鐸は実は一般的な銅鐸とは異なっていて、「変わった」銅鐸だということがわかります。そして、数は少ないながらもこの銅鐸にはよく似た仲間がいます。次に上げる銅鐸たちです。

- 福田銅鐸　　広島県広島市東区木の宗山出土（福田は昔の地名）
- 伝・上足守（あしもり）出土銅鐸　　岡山県岡山市上足守出土と伝えられる。
- 伝・伯耆（ほうき）出土銅鐸　　現在の鳥取県西部出土と伝えられる。
- 吉野ケ里遺跡出土銅鐸　　佐賀県吉野ケ里遺跡大曲一の坪地区で1998年に出土。

これらの銅鐸（福田銅鐸に代表させて「福田型」銅鐸と呼ばれてい

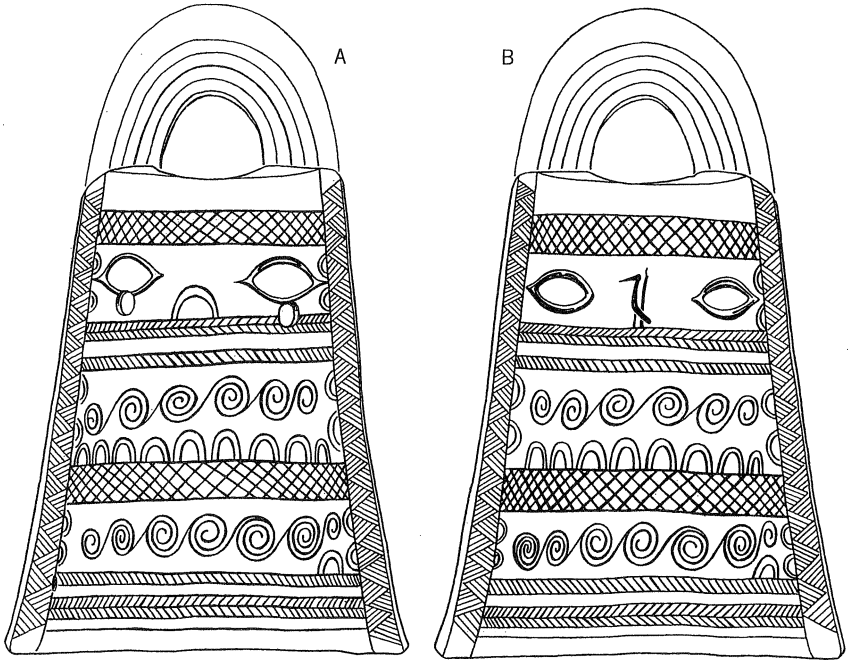


図10　岡山県上足守銅鐸実測図（国立歴史民俗博物館編　佐原真構成『歴博フォーラム　銅鐸の絵を読み解く』から転載）

ます。）は、次のような共通した特徴が見られます。

○　身の主要な模様が、横帯文である。
○　目や鼻、首の長い鳥などが特徴的に描かれている。
○　身の外側にめぐる鰭（ひれ）が複合鋸歯文（きょしもん）で飾られる。
○　釣り手の断面菱形部分（菱環（りょうかん）部）は２列の綾杉文（あやすぎもん）で飾られる。
○　身の前面に型持の穴がない。

これらの特徴は、まさに蒐古館の銅鐸の特徴そのものであり、一般の銅鐸にはない、もしくは非常にまれな特徴です。そして出土地にも大きな傾向があります。まず九州では現在のところ唯一の銅鐸である吉野ヶ里鐸が、この福田型です。他の４銅鐸も、銅鐸分布圏の西端で九州に近い中国地方出土なのです。

さらに、この福田型銅鐸を作ったと考えられる鋳型が２ヵ所で見つかっています。佐賀県鳥栖市安永田遺跡と福岡市赤穂ノ浦遺跡で、ともに九州です。このことは、蒐古館の銅鐸を含む福田型銅鐸が九州で作られたことを物語っています。

前にお話したように、銅鐸は基本的に近畿地方で作られたと考えられてきました。その中で、中国地方だけで出土していた福田型銅鐸は異彩を放っていました。ところが、この種の銅鐸の鋳型が九州で出土し、さらに吉野ヶ里で銅鐸そのものが発見されるに及んで、近畿中心の単純な銅鐸文化圏は見直しを迫られることになったわけです。蒐古

館の銅鐸をはじめとする福田型銅鐸の異様さは、それが近畿とは異なる工人によって作られたと考えることによって、理解しやすくなったといえるでしょう。

④　蒐古館の銅鐸と吉野ヶ里銅鐸は兄弟だ

1988年11月、佐賀県吉野ヶ里遺跡で1個の銅鐸が出土しました。この銅鐸は出土した当初から、蒐古館の銅鐸とよく似ていることが指摘されていましたが、2000年に佐賀県立博物館の特別展で両者が同時に展示されることになり、詳しい比較検討が行われました。その結果、形や大きさはもちろん、文様の細部にいたるまで一致していることがわかり、蒐古館の銅鐸と吉野ヶ里銅鐸は同じ鋳型で作られた「兄弟銅鐸」であることが明らかになりました。ただ、吉野ヶ里銅鐸には蒐古館の銅鐸に見られる特徴的な目鼻や水鳥の絵はありません。おそらくは、まず吉野ヶ里銅鐸が鋳造された後、その鋳型にあらためて目鼻や水鳥が彫り込まれ、蒐古館の銅鐸が作られたのでしょう。つまり、蒐古館の銅鐸は吉野ヶ里銅鐸の「弟」ということになります。

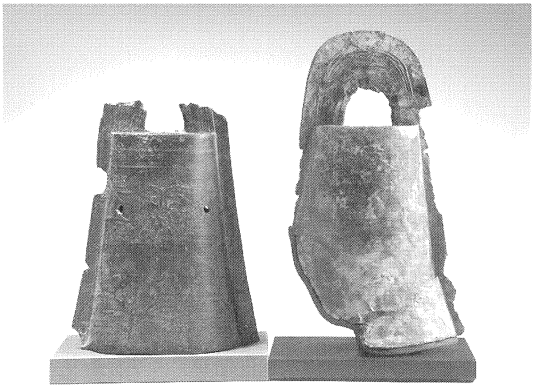


写真8　伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）と吉野ヶ里銅鐸

4．銅鐸と弥生時代

銅鐸は弥生時代（約2500年前～1700年前）に作られ、祭りに使われたものであることは前にお話しました。銅鐸についてよく知るためには、それが使われた時代背景を知る必要があるでしょう。そこでこの章では、弥生時代がどういう時代か、そして時代背景の中でどのように銅鐸が使われ始め、変化していったのかを想像も交えてお話してみたいと思います。

①　水田稲作のはじまりと銅鐸

水田稲作が引き起こす変化　弥生時代のはじまりを最も特色付けるのは、水田稲作の導入です。水田稲作は、およそ2500年前に大陸から北部九州に伝わり、やがて西日本一帯を経て弥生時代前期の終わり頃（およそ2200年前頃）には東北地方にまで広がっていきました。この水田稲作は、必要な農具や農具を作るための工具などの道具類一揃いもセットで導入されています。かなりの数の大陸の人たちが、技術や道具を携えて移住してきたのではないかと考えられています。そして、九州・四国・本州の大部分では、水田稲作が生業の中心となっていきました（もちろん水田稲作が困難な土地では、それに代わる穀物が作られたものと推測されます。）。

ところで、最近の研究では、稲は弥生時代をさかのぼる縄文時代に

も作られていたことが明らかになってきました。ただ縄文時代の稲作には、系統だった農具の発達などは見られず、現在見るような水田を切り開いての稲作ではなかったものと考えられています。あくまでも狩猟・採集や漁労を含めた多様な食糧生産のサイクルの中の一部として、雑穀等の栽培も組み込まれていたのだと思います。稲作も多様な食料獲得サイクルの小さな歯車のひとつだったといえるでしょう。ですから、縄文時代には稲作が導入されても社会を変えるような原動力にはなりませんでした。

一方で弥生時代になると、水田稲作の導入を機に、社会も大きく変わっていきます。水田を開き水路を引く作業は、大地のあり方を変える「土木工事」です。自らの手で土地と水を制御し、食料を生産していくことは、自然のサイクルに依存している縄文時代のあり方と根本的に異なっています。

祭りの変化　豊穣を祈る祭りのあり方も、大きな変化を求められたに違いありません。実際、縄文時代に一般的に使われた土偶や石棒といった独特な祭りの道具は、弥生時代の到来と同時にいっせいに姿を消します。弥生時代に銅鐸が現れてくる背景には、このあたりの意識の変化があることは想像に難くありません。

また、「土木工事」にはムラの人たちの共同作業が必須です。縄文時代と違った形で人々の結びつきが求められるとともに、作業を差配するリーダーが求められるようになります。日常でも、畦や水路の管理などの作業面ばかりでなく、水の管理など人々の間の調整が大きな

ウエイトを占める社会になっていったことは間違いないでしょう。ムラの中での人々の結びつきを強める役割を果たすのが祭りです。今では、祭りは大きく様変わりをしつつありますが、それでも、参加した人たちが盛り上がり、地域の結束力を高める効果があることは変わりないのではないでしょうか。

祭りとシンボル　祭りの中で、結束力を高めるのをより助けるはたらきがあるのが「シンボル」です。誤解を恐れずに現代にたとえれば、神輿（みこし）とか山車（だし）などがシンボルの代表です。なかには松江の鼕（どう）のように大きな音を鳴らすものもあります。このようなシンボルを中心として、人々は寄り集まり、参加者はともに盛り上がって見物の人たちも巻き込んだ一体感がうまれていきます。そしてシンボルは日常からかけ離れたものであればあるほど効果を発揮します。例えばきらびやかに飾られていたり、巨大であったり、大音響を発したりするものが祭りの中心にある例が多いことに気づかれるはずです。

このように考えていくと、銅鐸の役割を考えていく上で大きなヒントが見つかるように思えます。もちろん銅鐸には、祈りの対象としての役割があったものと思われますが、それに加えて集団の「シンボル」としての役割が大きかったと考えると合点がいかないでしょうか。弥生時代には、銅鐸の材料の青銅は国内では生産されず、全てが大陸からの輸入品だったと考えられ、めったに手に入らない貴重品でした。そして作られた当時は、金色に輝いていたはずです。さらに、めったに聞くことない金属の音色は幻想的に響いたことでしょう。銅鐸は地

域が結束するためのシンボルとして、うってつけのものといえないでしょうか。そして祭りのなかで、銅鐸を操る司祭者は地域を引っ張るリーダーがその役割を担っていたものと思われるのです。

②　クニの誕生と銅鐸の変化

ムラの統合と銅鐸の役割　西日本を中心に定着した水田稲作は、人々に安定した生活をもたらし、やがて耕作地の拡大が始まります。各地で水田が開かれると、ムラとムラとの間で様々な問題が生まれてきます。たとえば、谷の上流と下流に二つのムラがあると、同じ水源をめぐって争いが起きます。争いを解決するためには水を引く時期や量について、互いに調整をしなければなりません。話し合いで解決することもあるかもしれないし、場合によっては力ずくでの解決のあったかもしれません。いずれの場合でも、ムラのリーダーの力と統率力が重要となります。

このようにして、ムラ同士の統合がはじまり、やがてさらなる耕作地の拡大や地域間の利害の衝突から、争いや問題は広い範囲に拡大して、次第に大きな地域のまとまりが生まれてくるものと考えられます。

ムラ同士、地域同士の結びつきが強まってくると、銅鐸はまた別の役割も担うことになります。ともに祭りを行うもの同士の結束を高める役割とともに、たとえば隣の集団、あるいは今度同じ仲間になったそのまた隣の集団も、同じ銅鐸を使って祭りを行っていることの効果です。同じシンボルを共有することにより、違う集団同士が手を結び、

結束していく手助けになったのではないでしょうか。

有力者の出現と銅鐸の変化　「分かれて百余国を為す」、中国の歴史書の『漢書』は紀元前1世紀頃の倭（今の日本）の様子をこのように記しています。西日本を中心とした現在の日本列島に小さな国々がたくさん出来ていた、という意味です。水田稲作の開始で生まれてきた地域まとまりが、さらに拡大し、「国」と呼ばれるような結合体が生まれてきたことを示しています。その背後には「国」を取りまとめる有力者の力が大きくなっていったことがうかがえます。また『後漢書』には、57年に「奴国」王が後漢に使いを遣わして光武帝に金印を賜ったと記されています。教科書にも出てくる、あの有名な「漢奴委国王」金印です。ムラを引っ張り、ムラとムラを取りまとめたリーダーは、次第に「王」へと成長していったと考えられます。

「王」の出現は、中国の歴史書に現れるだけでなく、弥生時代の中ごろ以降、発掘される遺跡や遺物のなかからも読み取れるようになります。例えば、墓の中に巨大な高まりを持つものが現れたり、貴重な品々を亡骸とともに納めるものが出てきます。集落の中にも溝で囲まれた巨大な集落が出てき、「神殿」とも呼ばれる大きくて特別な建物も生まれます。富と権力をもち、祭りを取り仕切る特別な人、「王」が現れたことをこれらの資料は物語ります。

このような「国」や「王」の出現と成長は、弥生時代の中期から後期にかけて、およそ紀元前1世紀から紀元1世紀頃にかけて進んだものと考えられています。銅鐸も、このような動きに連動するように変

化をしていきます。銅鐸の変化については、前にお話しましたが、ここでもう一度簡単におさらいをします。出現した頃の銅鐸はせいぜい20～30cmと小形のものでしたが、次第に大きくなっていきます。それとともに、飾りの部分が増えていき、描かれる模様や絵も増えていきます。つまり、鳴り物という本来の機能に加え、見られることを強く意識した銅鐸へ変わっていくわけです。やがて、銅鐸の変化の最新段階になると、ぶら下げて鳴らすことが不可能なくらい大きくなり、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へ完全に変わってしまいます。この変化は、弥生時代の後期頃（1世紀頃）と考えられ、まさに地域がまとまり、「国」や「王」が形成されていくのと軌を一にしています。どうやら銅鐸にも、集団や有力者の力を表現するという側面が加わっていったようなのです。

③　埋められる銅鐸

銅鐸はその大部分が意図的に埋められた状態で出てきます。出土した状態が分かる例は、その大部分が鰭（周囲の突帯部分）を立てて埋めてありますので、埋め方にも一定の約束事があったものと考えられます。銅鐸はいつ、どうして埋められたのでしょうか。

銅鐸が埋められた時期　銅鐸が埋められた時期を考える上で参考になるのは、複数の銅鐸が同時に埋められている場合の組み合わせです。たとえば1950年に作られた物と1980年に作られた物がいっしょに埋められたとした場合、埋められた時期は1980年以降しかありえません。

複数銅鐸の同時埋納の場合、埋められた時期は最新型式の銅鐸の製作時期以降に限定されるわけです。その理屈で、同時に埋められた銅鐸の組み合わせに一定の法則を探してみよう、ということです。

一括して埋められたと考えられる銅鐸の組み合わせを見てみると、明らかに２つの傾向が見て取れます。最古段階、古段階、中段階の銅鐸が埋められている場合、最新段階の銅鐸は含まれていません。一方最新段階の銅鐸が埋められている場合は、それより古い銅鐸は含まれていないのです。このことは、古い銅鐸群はある時期（最新式銅鐸が作られるようになった時期）までに、埋められた可能性を示していると同時に、その後に作られた新しい銅鐸群は以前の銅鐸とは違う役割を担い始めたのではないか、と思わせます。長い期間使われてきた古い銅鐸は、新しい銅鐸が作られ始める段階で全てが埋められ、新しい銅鐸はその役割を終えると同時に一斉に埋められたのではないか、と考えられるのです。

埋められる時期によって大きく分かれる新古の二つの銅鐸群は、銅鐸の型式としても大きな変換点にあたります。ちょうど古い銅鐸が埋められる頃を境に、銅鐸は巨大化の速度を増し、新しい銅鐸はもう吊るすことのできない完全な「見る銅鐸」に変わってしまいます。つまり、古い銅鐸が埋められるというのは、銅鐸の持つ役割なり、働きなりに大きな変化が起き、それまでの銅鐸のもつ意味が失われたことを示すのではないでしょうか。

またこの二つの時期の境目は、およそ弥生時代後期の初め頃（１世

紀頃）と考えられ、ちょうど各地で「国」と呼ばれる大きなまとまりができたり、「王」を葬ったと考えられる大きな墓が作られていく時期とほぼ一致しているのは興味深い事実です。銅鐸の変化は、このような社会の変化と決して無関係ではないでしょう。

出雲ではいち早く銅鐸が使われなくなる　さて、今までお話してきたような銅鐸が埋められるあり方を念頭において、宍道町周辺の出雲地方に目を向けてみましょう。実は、銅鐸の中心地の近畿地方や東海地方とは違う、面白い事実があります。出雲の銅鐸を見ると、古い銅鐸が埋められた後に作られた新しい一群の銅鐸は見られません[注]。つまりは、明らかに巨大化した「見る銅鐸」は出土していないのです。加茂岩倉遺跡の39個の銅鐸も神庭荒神谷遺跡の６個の銅鐸も、もちろん伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）も50㎝より小さい「聞く銅鐸」なのです。

巨大な「見る銅鐸」は、それ以前の地域の統合のシンボルとしての役割以上に、集団やリーダー（王）の力を誇示する役割が大きくなったのではないか、ということを前にお話しました。では、出雲では「見る銅鐸」が使われなかったとすれば、その力を誇示すべきリーダーがいなかったのでしょうか。いえいえ、そんなことはありません。出雲では、「見る銅鐸」よりももっと効果的に、リーダー（王）の力を誇示する装置を生み出していたのです。

青銅器の祭りから墓の祭りへ　その装置とはなんだったのでしょう。それは、リーダー（王）を葬る巨大な墓でした。古い銅鐸群が作

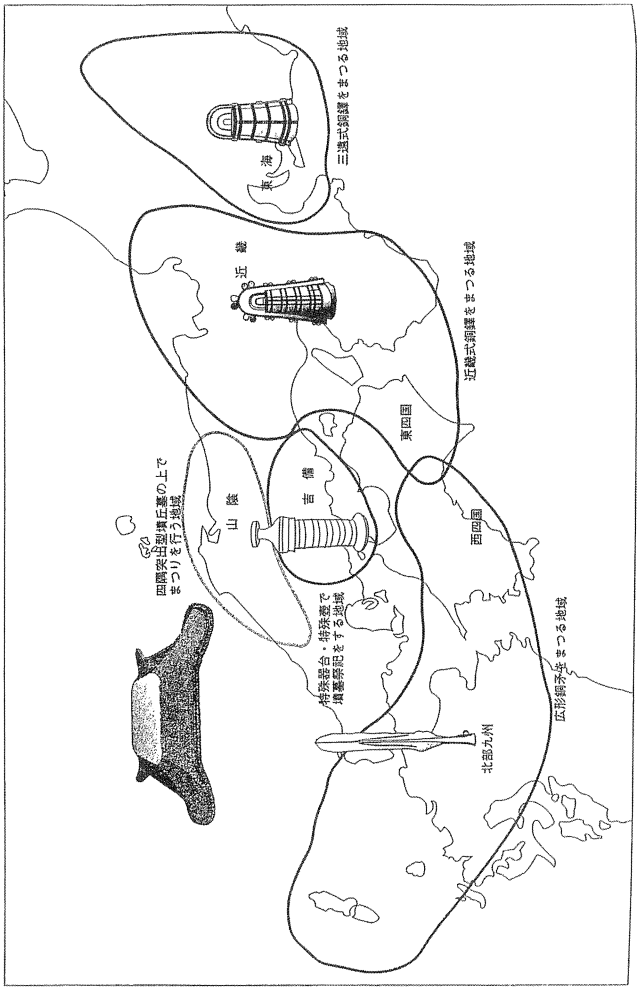


図11　弥生時代後期頃の地域のシンボル模式図

られる終わり頃の時期（弥生時代中期後半、紀元前１世頃）、西日本の日本海沿岸地域に、四角い高まりの周りに石を張った「貼石墓」が作られ始めます。やがて中国山地から山陰地方で、これらの貼石墓の四隅が突き出す変わった形のお墓、「四隅突出型墳丘墓」が生まれます。リーダーの力を誇示するための、新たな祭りの装置が出来上がりつつありました。

写真 9　江津市波来浜遺跡の貼石墓
江津市教育委員会提供

古い一群の銅鐸が埋められてしまった後の弥生時代後期（1世紀頃）、四隅突出型墳丘墓は、山陰地方で盛んに築かれるようになります。そして弥生時代後期後半頃（2世紀頃）、他を圧倒するような巨大な王の墓が出雲で作られます。西谷3号墓がその代表で、島根大学の調査により内容が明らかになっています。差し渡し50mにも及ぶ巨大な墳丘（高まり）は、弥生時代のお墓としては

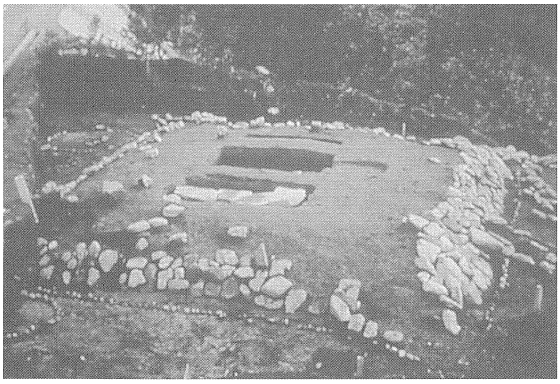


写真10　瑞穂町順庵原1号墓（四隅突出型墳丘墓）
瑞穂町教育委員会提供

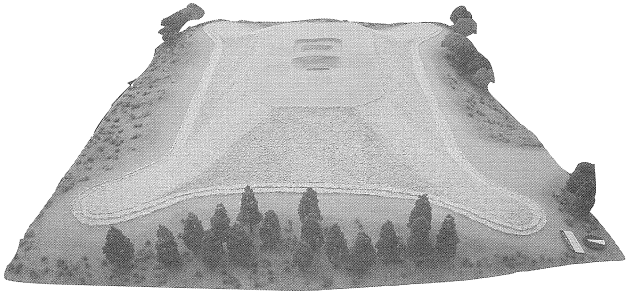


写真11
西谷3号墓の
復元模型
島根県教育委
員会提供

日本でも最大級、斜面はすべて石で飾られ、裾には2列の石列が並んでいました。王の力を誇示するには、十分すぎる装置と言ってよいでしょう。王のなきがらは、大陸の影響のもとに作られた二重の木棺に大量の朱とともに納められ、鉄剣と見事な玉が副えられました。そして墓上では、亡き王にゆかりの深いものが集まって盛大な祭りが行われたと考えられます。

地域をまとめ、地域と地域をつなげてきた銅鐸の祭りは、巨大な墓で執り行われるリーダー（王）を中心に据えた祭りに取って代わられました。集団を統合する祭りの中心は、地域全体を象徴した銅鐸から、地域を取りまとめたリーダー（王）の墓に移行したと言ってもいいでしょう。出雲（今の岡山県を中心とする吉備地方も同様でした。）では、近畿や東海で巨大な「見る銅鐸」を使っていた弥生時代後期に、いち早く銅鐸の祭りを捨てて、墓によって王の権力を現す時代へと移行していったのです。

銅鐸の埋納と王の墓の出現は、新たな時代への大きなステップでもありました。やがて3世紀になると、各地の王たちは近畿地方を中心に大きな連合体を作ります。邪馬台国を中心とした連合体です。そしておそらくはその女王卑弥呼の死を契機に、統一規格の墓、前方後円墳が生まれ、全国各地で同じ規格の墓が作られます。墓によって地域の王たちの地位や立場を表現する時代、古墳時代の始まりです。それとともに、出雲や吉備以外の各地でも、青銅器の祭りは終わりを告げたのです。

注　この本を書き終えた後の平成15年１月、出雲市の青木遺跡で最新段階の見る銅鐸の一部（飾り耳）が出土しました。その点で従来の、出雲ではいち早く銅鐸がなくなる、という理解は修正を迫られることになりました。ただし、出土したのは壊れた（壊された？）銅鐸の一部の破片です。銅鐸の本体が埋められていることと、壊れた破片が出てくることとは大きな意味の違いがあると思われますので、銅鐸の祭りからリーダーの墓の祭りへ変化していく、という理解は大筋では修正する必要はないと考えています。しかしながらこれはあくまでも現時点での理解です。今後大幅な考え方の修正を迫られる発見があるかもしれません。これが考古学の怖さであると同時に面白さでもあります。

5．宍道町周辺の弥生時代と青銅器

以上のような、弥生時代という時代背景を踏まえて、宍道町周辺で出土している青銅器や弥生時代の様子について最後にお話したいと思います。

①　莫大な青銅器

出雲といえば、「青銅器王国」とも言われるほど多くの青銅器が出土しています。蒐古館の銅鐸もその一つと考えられますが、なんと言っても宍道町の隣の斐川町の荒神谷遺跡と加茂町の岩倉遺跡は、それぞれ銅剣の出土数日本一、銅鐸の出土数日本一、という常識はずれの遺跡です。

荒神谷遺跡と蒐古館の銅鐸　荒神谷遺跡は、358本という銅剣のほか、6個の銅鐸、16本の銅矛もいっしょに出土しています。蒐古館の銅鐸との関連で考えると、荒神谷の銅鐸・銅矛は重要です。

写真12　荒神谷遺跡　銅剣出土状況
島根県教育委員会提供

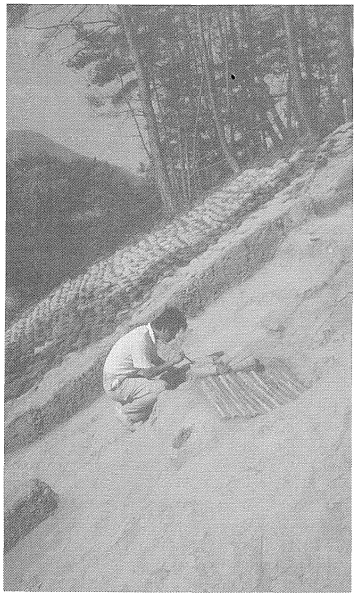


写真13　荒神谷遺跡
銅鐸・銅矛出土状況
島根県教育委員会提供

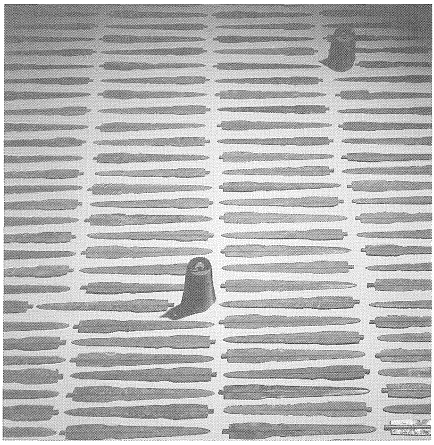


写真14　荒神谷遺跡　銅剣・銅鐸
島根県教育委員会提供

写真15　荒神谷遺跡出土　1号銅鐸
島根県教育委員会提供

6個の銅鐸のうちの一つ（1号銅鐸）は、蒐古館の銅鐸と同様に九州で作られた可能性が指摘されています。また銅矛は、北部九州の権力の象徴とも言うべき青銅器で、九州以外でこれだけまとまって銅矛が出土している例はありません。つまり、弥

生時代の出雲地方は、当時の先進地の九州と非常に強い関係があったことを示しているわけです。こう考えると、宍道町に九州で作られた特殊な銅鐸が伝えられていることには、大きな意味があることに気づかれると思います。蒐古館の銅鐸は、たまたま偶然に九州から出雲にもたらされたという性格のものではなく、北部九州の有力者と出雲の有力者との太いパイプを象徴する形でもたらされた重要な青銅器の一つだった可能性が高いのです。

358本の銅剣は、いずれもよく似た形で、しかも出雲中心とした中四国地方の限られた地域でしか見つかっていない型式です。「出雲型銅剣」とも呼ばれ、出雲地方を中心とするかなり広い範囲での地域統合を象徴するシンボルだった可能性があります。出雲のアイデンティティーを現すものだったのかもしれません。

出雲と近畿・北部九州　一方、加茂岩倉遺跡からは39個の銅鐸が出土しました。一部には珍しい模様があることから、出雲で作られた可能性が指摘されるものもありますが、多くは、近畿地方で作られたものと考えられています。

荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡を

写真16　加茂岩倉遺跡出土の銅鐸
島根県教育委員会提供

はじめとする宍道町周辺の青銅器のあり方は、当時の２大有力地であった北部九州および近畿地方と密接な関係を取り結びながら、独自の青銅器（出雲型銅剣）を自らの力で生産し、存在をアピールする出雲の姿を見ることができるのではないでしょうか。

さて、これらの青銅器が埋められたのはいつ頃のことなのでしょうか。はっきりしたことはわかっていませんが、おおよそ弥生時代中期の終わり頃から後期初め頃（今から2000年前、紀元前後）との考え方が有力です。青銅器が使われていたのは、この頃よりも前で、荒神谷遺跡の銅鐸の中には最古段階のものも含まれていますので、弥生時代の前期終わりから中期初め頃には出雲でも青銅の祭りの道具を手に入れていたものと思われます。そして、青銅器が埋められた紀元前後頃を境に、出雲では青銅器を使った祭りは姿を消したらしいことは前にお話したとおりです。

②　有力者の墓

出雲最古の貼石墓－三成２号墓－　荒神谷や加茂岩倉で青銅器が埋められた頃、宍道町に注目される墓が作られます。来待にあった三成２号墓です。宍道湖に突き出した丘の上に作られたこの墓は、一辺５ｍと小型ながらも明確な四角い高まりを持ち、その斜面には石を貼っています（貼石墓といいます。）。この高まりの上には木棺を納めた墓穴が一つ作られています。この木棺に葬られた人は、来待周辺をまとめた有力者であった可能性が高いと考えられます。この三成２号墓は

写真17　三成２号墓（『山陰本線玉造温泉・来待間線増工事に伴う埋蔵文化財調査報告』より転載）

弥生時代中期終わり頃（紀元前後）に作られたと考えられ、高まりを持つ貼石墓としては出雲地方でも最古級のものです。出雲で銅鐸や銅剣などの青銅器が埋められ、使われなくなるとほぼ同じ時期に、このような墓が宍道町に作られていることは重要です。

三成２号墓の頃の宍道周辺　少し想像を交えて、宍道周辺の当時の様子を話してみましょう。弥生時代の中ごろ（紀元前１世紀頃）には、おそらく宍道周辺でも広く水田稲作が行われ、たとえば今の来待地区くらいの広さで地域のまとまりができていたと推測します。そして、豊饒を祈ったり豊作を祝う祭りの場では、来待地区のまとまりを象徴

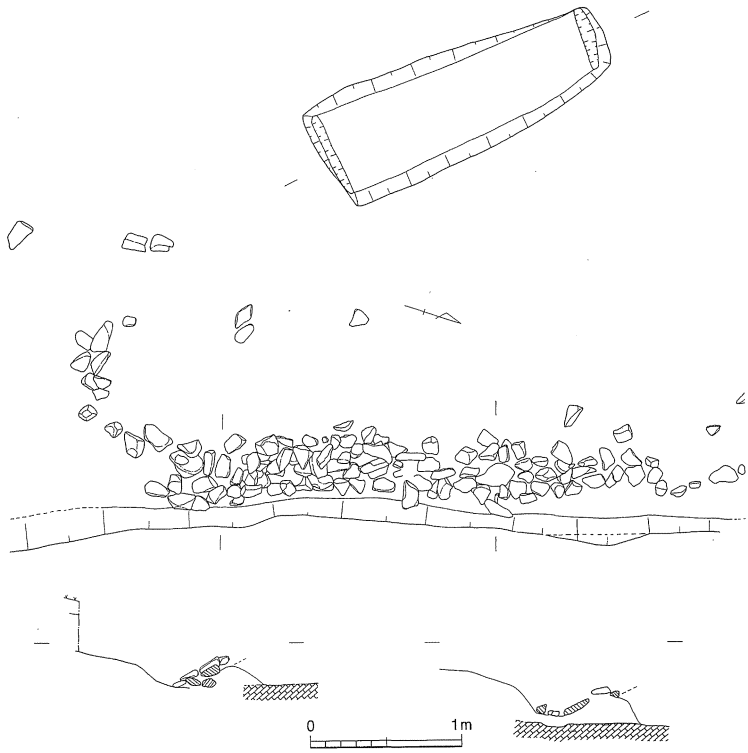


図12　三成 2 号墓実測図

する銅鐸が使われていたと考えられます。あるいは、もう少し小さな範囲（たとえば現在の大字単位）で銅鐸を所有し、全体の祭りの中で持ち寄っていた可能性もあります。

この頃、前にも話したように西日本一体では「国」と呼ばれる大きな地域的まとまりができつつありました。それらの「国」同志の間では、物資のやり取りが行われ、一部の大きな「国」では、中国や朝鮮

半島との外交を行うところも出てきます。このような社会情勢の中で、出雲地方でも大きなまとまりを作ろうという動きが始まったものと思われます。荒神谷遺跡を初めとする大量の「出雲型銅剣」は、そういう背景の中で作られたものでしょう。すると、否応なく来待も大きなまとまり（その範囲は今の出雲地方くらいなのか、あるいはもう少し小さな範囲だったのかはよくわかりません。）のなかに取り込まれていきます。来待にも、出雲のまとまりを象徴する銅剣がもたらされた可能性が高いと思います。

さて大きなまとまりができると、来待としてはその中に埋没するだけではいけません。出雲の中で存在感を示し、たとえば「国」間の外交で得た貴重な物資の分け前にもあずからねばなりません。となれば、来待の意思を代弁し、力を発揮する代表者が必要です。もちろんそれ以前にも、何らかの形で地域のトップにたつ人物はいたでしょうが、地域の利害を背負って立つには、その人物が持つ力をより強化し、内外にアピールしなければならなくなると思われるのです。

そういう情勢の中で作られたのが、三成２号墓ではないでしょうか。三成２号墓は、宍道湖を目の前にする丘の上に作られました。宍道湖は、当時の出雲の交通の大動脈です。宍道湖を通る人々に、「来待の首長これにあり」とその力をアピールするために作られたのでしょう。同時に、地域の内部の人々には、地域の代表者たる来待の首長が、自分たちより高い位置に立つことをはっきりと認識させる効果があったものと思います。

表 3　島根県・宍道町の弥生時代年表

年代	約2500年前		約2000年前		約1800年前	3世紀後半頃
弥生時代の時期区	早期	前期	中期	後期	終末期	古墳時代
西日本の出来事	この頃水田稲作が出雲地方に伝わる？ 水田稲作が九州に伝わる		聞く銅鐸が使われる／見る銅鐸		邪馬台国の時代	前方後円墳が作られ始める
島根県の出来事、遺跡		三田谷Ⅰ遺跡	荒神谷・岩倉遺跡 波来浜墳墓	西谷3号墓		神原神社古墳
			青銅器使われる（出雲）／四隅突出型墳丘墓作られる			
宍道町の遺跡・遺物			蒐古館銅鐸 三成2号墓	野津原Ⅱ遺跡 上野遺跡墳墓？ 山守免遺跡	上野Ⅱ遺跡	上野1号墳

青銅器から首長の墓へ　このようにして、地域の首長の死を契機にして大きな墓を作り、地域の結集と力を墓で表現する時代がはじまります。その結果、地域の結集のシンボルでもあった青銅器は、その役割を終えて静かに地中に埋められたのだと思います。その時期は、宍道で三成2号墓が作られた直後くらいだったのではないでしょうか。

来待で使われてきた銅鐸や銅剣も、どこか周辺の山中に今もひっそりと眠っているかもしれません。あるいは、荒神谷や加茂岩倉に持ち込まれた可能性もあります。蒐古館の銅鐸も、出雲のどこかで丁重に土の中に納められたことと思います。

その後、2世紀後半頃には今の出雲市や安来市に巨大な四隅突出型墳丘墓が作られたことは前にお話したとおりです。宍道町ではまだ四隅突出型墳丘墓は見つかっていませんが、佐々布の上野遺跡ではこの時期の大きなお墓に特有の吉備から持ち込まれた葬送用土器が見つかっています。引き続いて、大きなお墓が宍道町にも作られたことは間違いないでしょう。

③　弥生時代のムラ

よく分かっていない弥生時代前期～中期のムラ　さて、宍道周辺で青銅の祭器が用いられていた頃のムラはどこにあったのでしょう。実は、水田稲作が伝来し、弥生時代がはじまった頃から青銅器が使われていた頃の遺跡は、宍道町内ではほとんど知られていないのです。ただ、周辺に目を広げると、松江市乃木福富町の欠田遺跡や西川津遺跡、出雲市の矢野遺跡や三田谷Ⅰ遺跡など多くの遺跡で弥生時代前期の土器等が出土しています。また弥生時代中期頃になると、出雲平野や松江周辺を中心にさらに遺跡が増えていく様子がうかがえます。これらの遺跡のほとんどは低地に立地しており、開かれた水田の近辺に集落を構えたものと思われます。宍道町でこの時期の遺跡が見つかってい

写真18　野津原Ⅱ遺跡の全景
島根県教育委員会提供

写真19　上野Ⅱ遺跡

ないのは、低地の発掘調査がほとんど行われていないためで、おそらくは現在の水田や集落の下に眠っている遺跡があるものと考えられます。青銅器やお墓だけでは、地域の歴史を綿密に描くことはできません。この時期のムラの遺跡を見つけていくことが、

宍道町の歴史を明らかにしていく上での大きな課題の一つです。

山の上にある弥生時代後期のムラ　ところが、青銅の祭器が埋められた後と考えられる弥生時代後期のムラの跡は、宍道周辺の丘陵の上でたくさん見つかっています。白石の野津原Ⅱ遺跡や山守免遺跡、佐々布の上野遺跡や上野Ⅱ遺跡がその代表で、現在の集落や水田からは相当高い山の上の遺跡もあります。実は出雲で青銅器が使われなくなる前後の頃の弥生時代中期終わり頃から後期にかけて、山陰地方全般で集落の多くが丘陵上に上がっていきます。全国的に見ても、微妙な時期のずれはあるものの同様の傾向が見て取れます。銅鐸を初めとした青銅器が使われなくなる（全国的に見ると古い一群の青銅器が埋められる）事実は、その背景に大きな社会の変動があったことをうかがわせます。全国的に、山上に集落が作られる背景には、そうした大きな社会変動に連動して、地域間に争いや緊張関係が生まれたことがあるのではないかと考えられています。青銅器が使われなくなったことが、結果的に弥生時代の社会を変えていき、より大きなまとまり（邪馬台国）を形作る始まりとなったとも言えるでしょう。それは後の日本という国の枠組みを作っていく序章でもあったのです。

6．おわりに

以上、銅鐸はどういうものか、宍道蒐古館にある伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）がどういう特徴があるのか、銅鐸にはどういうはたらきがあったのか、といったことについて想像を交えてお話をしてきました。私の力不足のため、十分意は尽くせていませんが、蒐古館の銅鐸のことに限らず、その時代背景や地域の中での役割について、解説したいと思って書いたつもりです。蒐古館の銅鐸は、類例が少ない珍しい銅鐸であると同時に、美術的にも優れた作品です。ただ、優れた銅鐸という視点だけではなく、それが使われた時代や地域のあり方を知ることで、１個の銅鐸からもっともっといろいろなことが見えてくるはずです。私がここでお話をしたのはひとつの考え方、解釈で、皆さんには皆さんなりの解釈が出てくるかもしれません。ぜひとも、銅鐸に限らず、いろいろな出土品や歴史資料を見て、思いを膨らませてください。そうすると、歴史に関わる資料を見ることがどんどん楽しくなってくることはまちがいありません。一人でも多くの人にそういう思いが伝われば、幸いです。

最後になりましたが、伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）を実測し、観察するにあたっては、八雲本陣記念財団木幡修介理事長、稲田信館長をはじめとする関係者の皆様から多くのご協力とご配意をいただきました。また卜部吉博、角田徳幸、北島大輔、春成秀爾、松本岩雄、松

山智弘の各皆様からは多くのご指導とご教示をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

参考にした文献（もっと知りたい方のために）

この本を書くにあたって、参考にした主な文献は次のとおりです。もっと多くのことを知りたい方は、参考にしてください。

岩永省三　『金属器の登場』歴史発掘７　講談社　1997年
勝部昭　「出雲・隠岐発見の青銅器」『古文化談叢』第８集　九州湖文化研究会　1981年
国立歴史民俗博物館編　佐原真構成『歴博フォーラム　銅鐸の絵を読み解く』小学館　1997年
近藤正　「島根県下の青銅器について」『山陰古代文化の研究』所収　1966年
佐原真　「銅鐸の鋳造」『世界考古学体系』２　日本Ⅱ　平凡社　1960年
佐原真　『銅鐸』日本の原始美術７　講談社　1979年
佐原真　『祭りのカネ銅鐸』歴史発掘８　講談社　1996年
島根県教育委員会　『出雲神庭荒神谷遺跡』1996年
島根県古代文化センター　『いにしえの島根ガイドブック』1996年
島根県教育委員会　『古代出雲文化展　－神々の国　悠久の遺産』1997年
宍道町　『宍道町史　通史編　上巻』　2001年
春成秀爾　「最古の銅鐸」『考古学雑誌』70－1　日本考古学会　1984年
春成秀爾　「九州の銅鐸」『考古学雑誌』75－2　日本考古学会　1989年

著 者 紹 介

丹羽野　裕（にわの　ひろし）
1959年6月27日生まれ
1982年　岡山大学法文学部卒業
現　在　島根県古代文化センター勤務
専　攻　日本考古学
著書・論文
『宍道町史　上巻』（共著）
「宍道蒐古館保管の銅鐸」『宍道町歴史叢書』6
「宍道町弘長寺遺跡出土の石器について」『宍道町歴史叢書』3
「宍道町　三成墳墓群について」『宍道町歴史叢書』4
「島根県出土の旧石器時代の石器」（共著）『古代文化研究』№11
ほか

宍道町ふるさと文庫17
伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）と
宍道町の弥生時代
2003年3月31日　第一刷発行
編　著　丹羽野　裕
発　行　宍道町蒐古館
八束郡宍道町大字昭和1番地
印　刷　柏木印刷株式会社
松江市国屋町452－2

伝出雲出土銅鐸（木幡家銅鐸）と吉野ヶ里銅鐸